

令和6年度第1回

松本市総合教育会議会議録

松本市教育委員会

令和6年度第1回松本市総合教育会議会議録

令和6年度第1回松本市総合教育会議が令和6年5月30日午後3時30分市役所第一応接室において開催された。

令和6年5月30日（木）

議 事 日 程

令和6年5月30日午後3時30分開議

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 議題
子どもたちの多様な学びを保障するために
- 4 閉会

〔構成員〕

市	長	臥 雲 義 尚
教 育	長	伊佐治 裕 子
教育長職務代理者		小 柳 廣 幸
委 員		佐 藤 佳 子
	//	春 原 啓 子
	//	福 澤 崇 浩

EXPO-Jルーム代表 出居番丸西主人	岩 田 清 美
------------------------	---------

教 育 顧 問	荒 井 英治郎
---------	---------

〔事務局構成員〕

副 市 長	宮之本 伸
総 務 部 長	田 中 史 郎
教 育 次 長	赤 羽 志 穂
教 育 監	坂 口 俊 樹
行 政 管 理 課 長	松 本 志 保
学 校 教 育 課 長	清 沢 卓 子

〔事務局〕

教 育 政 策 課 長	小 西 え み
教育政策課	
教育政策担当係長	降 旗 基
教育政策担当係長	伏 見 宏 美
教育文化センター	瀧 澤 公 也
学校教育課	
学校 ICT 推進担当係長	福 嶋 高 志
学校支援室指導主事	高 山 智 史

≪開会宣言≫ 午後３時３０分

教育次長は令和６年度第１回松本市総合教育会議の開会を宣言した。

赤羽教育次長 定刻となりましたので、ただいまから令和６年度第１回松本市総合教育会議を開催いたします。

私は、本日、進行を務めます教育次長の赤羽でございます。よろしくお願いいたします。

なお、本日の会議は公開とし、お手元の次第により進行いたします。

最初にこの会議を主宰する臥雲市長からご挨拶をお願いいたします。

臥雲市長 皆さん、こんにちは。令和６年度１回目の総合教育会議にご出席いただき、ありがとうございます。

今日は、「子どもたちの多様な学びを保障するために」というテーマです。冒頭に話題提供をいただく岩田清美さんは、学校に行かない選択肢をしている子どもたちや保護者の方々に、様々な人やものやことに出会える学びの場を開いているということで、子どもたちの多様な学びの保障という観点からお話をさせていただきます。

昨年度の総合教育会議は、１回目が「探究的な学びとリーディングスクールの挑戦」、２回目が制服や新入学用品等の購入をより自由にしてはどうかというテーマでした。大きく捉えれば、教育の多様化、多様な学びでしたが、あくまでも公立学校の枠内で多様化、自由化、個性化を進めていこうということがありました。

今日のお話は、公立学校の枠に収まらない、いわば土俵を広げて多様な学びを考えていくという視点だと思いますので、岩田さんのお話をまずお聞きして、教育委員の皆様から闊達なご意見を出していただければと思いますし、荒井教育顧問にも専門的な知見からのご助言をお願いいたします。

それでは、よろしくお願いいたします。

赤羽教育次長 続きまして、教育長からご挨拶をお願いします。

教育長 皆様、こんにちは。本日は、岩田さんにお忙しいところおいでいただきまして、心より感謝申しあげます。

荒井先生もご出席ありがとうございます。

「子どもたちの多様な学びを保障するために」というテーマですが、全国的

な傾向として、教育委員会が一番の課題は、不登校の増加だと思います。

令和5年度の小中学校の不登校の児童生徒数（速報値）は749人で、令和4年度の680人に対しておよそ1.1倍になっており、増加の一途をたどっています。一番増加率が高かったのが、令和3年度から令和4年度にかけての1.3倍で、かなり深刻な状況で、昨年度から心配をしていました。

その背景は何かと教育関係者も悩んでいると思うのですが、私は教育の専門家ではないですが、やはり従来の学校文化に息苦しさを感じている子どもたちが多いということではないかと思います。

それを解決していくための一つの方策として、リーディングスクールという、子どもたちの学校での学びをもう少し豊かにして、子どもが主体的に学べる環境にしていこうという取組みをしております。

それからもう一つ、教育委員さんと一緒に研究してきた制服や学用品の購入の在り方についても、従来の学校文化を問い直してみようということで、市長とも共有させていただいて取り組んでおります。

そして、今回は、様々な場所で子どもたちを支えてくださっている岩田さんのお話を聞いて、子どもたちが自ら興味・関心を持って学びたいという学びを保障していきたいと心から願っています。今日はそのヒントをいただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

赤羽教育次長 それでは、早速議事に入ります。

本日の議題は、「子どもたちの多様な学びを保障するために」です。

初めに松本大学予備校EXPOーJルーム代表で、誰もが集えるまなびの場出居番丸西の主人でもある岩田清美様からお話をいただいた後、市長との意見交換を行い、荒井教育顧問からのご助言をお願いしたいと思います。

岩田様は、「一歩外に出て、いつもと違う人、世界に、出会ってみる」をモットーに、様々な学びの場を開いていらっしゃいます。

それでは岩田様、よろしくお願いいたします。

岩田氏 皆様、こんにちは。岩田清美と申します。今日はこの場にお呼びいただきまして光栄に思っています。本当にありがとうございます。

自己紹介から始めさせていただきます。私は大学を出て、長野県蘇南高等学校で2年間、保健体育の教員をしていました。実はその後、この市役所でも3

年ほど臨時職員で働いていたので、とても懐かしい場所でもあります。

その後、子育てなどをする中で、2003年に1年間だけ清水中学校に市の職員として勤めさせてもらい、2004年から2019年まで信濃むつみ高校で教員として勤めさせていただきました。当時は通信制の高校といいますと、不本意けれどもここにしか来られなかったというようなマイナスイメージが少しあったわけですが、私たちも選ばれる学校を目指してやってきて、こういう時代になって、信濃むつみ高校も創立20年を超え、行ってみよう、行ってみたいという学校になれたような気がしていますし、その礎をつくれたかなと思っています。

2019年に、不登校の生徒さんの学習支援を始めたいということで、同じ学園内にあります松本大学予備校に異動して、EXPO-Jルームを立ち上げました。今年で6年目になりますが、生徒さんの学びの場や、保護者の皆さんの相談の場という形で、少しはお役に立てているかなと思っています。

それだけでなく、いろいろな意味でハンディキャップを抱えていたり、社会への一歩が出ない生徒さんや若者がいたりするという中で、今から2年前の2022年、お城の近くにあります出居番町に「出居番丸西」という不思議な名前の、若者や子ども、保護者の方も集える場所をつくりました。

誰もが集まれるまなびの場と言っていますが、私はいろいろな意味で、学びは出会いだと思っています。人やものやことに会うことが学びの第一歩だと思っているので、そのようなハブになる場所ができるといいなと思い、出居番丸西を開いています。

ここ20年ぐらい、学校に行かない選択をした子どもたちや生徒さんたちとずっと付き合ってきました。私たちは「学校に行っても、大丈夫！」だと、皆さんにはお話ししています。今までは学校が中心にあった社会だった、そこに来るのが当たり前だった。ですが、今そういう時代を乗り越えて、いろいろな意味で学びの場は多様になってきていると思います。

難しいのは、「オトナの作ってきたシステムの問題」です。不登校の生徒さんがこれだけ増えているのは、彼らが悪いわけでも、保護者の方が悪いわけでも、学校が悪いわけでも、先生方が悪いわけでもないのです。今の教育のシステムが、今の時代に合っていないのが一番大きな問題だと思います。

さらに、「オトナの作ってきてしまった目に見えないシステムの問題」、これは価値観の問題です。「学校に行っていないと駄目だ」とか、「学校に行けないのは駄目でしょう」という、私たちぐらいの世代の人間は学校という選択肢しかなかったで、それしか知らなかった。なので、学校以外のことが頭にないのです。それがなかなか価値観が合っていないという今の状況を生み出しているのです。

今の子どもたちは、生まれたときからスマホやタブレットがあり、二次元の世界でも友達がいる。私たちは三次元でこうやって顔を合わさないと友達ではないと思いがちですが、彼らはネットの中や文字だけのつながりでも友達と考えています。なので、ネットの外をオフ会などとしますよね。そういった子どもたちと全然違う世界を見ている。私たち大人が彼らとは全然違う時代を生きてきてしまっている、そういう価値観の相違もあります。オトナが思う学校と、子どもたちが考える学校とは違っているんです。それを取り巻く環境も。ですので、学校に行っていないなくても大丈夫だよと、私はいつもお話しさせていただいています。

今、不登校のことをだいぶ問題にさせていただいて、社会も寛容になってきつつあります。学校に行っていないくて、私たちみたいなところに来ていても、そんなに問題ではない感じはしますが、それでもやはりこの地域の特徴として、高校に行かれないのではないかと、市内4校に行かれなかったらどうしよう、県立高校に受からなかったらどうしよう、などの価値観がまだ残っています。それは私たち大人がつくってきてしまったものであるもので、そういったところの柔軟さも必要になってくるのかなと思っています。

今日もここに来る前に、保護者の方の相談を受けてきたのですが、今まで、いろいろな生徒さんに接してくる中で、どうして学校に行かれなくなったかというのは、生徒さん自身もなかなか分かりません。いじめなど明確な理由がある子も中にはいますが、何で行かなくなったのか、本人たちも分からないような状況なのです。

ただ、どうして家から一步出ようと思ったか、何で学校に戻ろうと思ったかを聞くと、子どもたちは必ず、母親の目が自分から離れてからと言います。やはり大人も自分の人生を生きているところを見せなくてははいけません。中には、

保護者の方が仕事を辞めて毎日子どもと一緒にいてくださるお家もあります。そういう時期も必要かもしれませんが、お仕事を続けていただいたり、お仕事の時間を少し減らしていただいたりするぐらいの形で、あまりお母様方の生活まで変えてしまうと、彼らは過敏なくらい敏感なので、自分のために母親の生活が変わってしまっているとか、母親の人生を苦しませてしまっていると、彼らが一番強く感じているところなのです。一番良いのは、大人もわくわくして自分の人生を生きている。保護者に限らず、私たち大人もわくわくして自分の人生を生きている、大人になっても楽しいぜということを子どもたちに知らせてあげる、見せてあげるというのも大事だなと思っています。

今、出居番丸西にはいろいろな子たちが集ってくれて、去年、松本県ヶ丘高校探究科の生徒さんが駄菓子屋を開いてくれました。この写真は、その後に、手伝ってくれた高校生とおばちゃんたちで、たこ焼きパーティーをしたときの様子です。

学びの多様性への理解についてですが、フリースクールはぜいたくとか、不登校は自己責任といった声も聞かれます。ただ、彼らなりに、私たちなりに、フリースクールは学びの場として確立できる努力をしていますし、いろいろな意味で社会に開かれた場所になっています。

学校を否定するわけではありません。学校はすごいところです。そこにいるだけで、良いことも、嫌なことも、いろいろな人との出会いも、毎日シャワーのように浴びせてくれます。学校に勝るところはないです。私たちはそれができないので、そういう機会をわざわざ設けたり、一人一人の子どもたちを大切に扱っていく。学校は公なので、大勢の生徒さんを大切に扱っていくところですし、私たちはそこを選択しなかった生徒さんに対して、一人一人大事に、時間をかけて見守っていくことができる状況だと思います。

今日は「子どもたちの多様な学びを保障するために」がテーマです。なので、私から、今、課題となっていることを幾つか挙げさせていただきました。

まず一つは、学校に行かなくなった、学校を選択しなくなったときに、必要な情報が必要としている人にきちんと届いているかだと思います。情報の提供先の明確さと、誰がどう話すのか。例えば学校の先生が話すと、学校に来ないことが確定されてしまったのではないかという懸念やいろいろな捉え方があ

るのでとても難しいところだと思います。去年、荒井先生ともご一緒させていただいて、学校に行かなくなった生徒さんや保護者と学校をつなぐコミュニケーションシートをつくりましたが、それを使うときも、学校の先生から渡すのか、スクールソーシャルワーカーの方から渡すのかで、大きな違いが出てくるかと思いますので、そのようなところも考えながら使っていただければいいかなと思います。とにかく情報がないということを保護者の方からすごく聞きます。

各公立小中学校にはスクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）の方が入っていらっしゃるって、年々人数も多くなっているかと思います。私のところのＥＸＰＯーＪルームにしても出居番丸西にしても、紹介してくださるのはほぼＳＳＷの方ですので、まず学校はＳＳＷにつないでいただけると一番良いと思います。

けれども、松本市の場合だと附属松本中学校はＳＳＷが使えないという話を聞いています。去年４月から６月ぐらいにかけて、附属松本中学校の生徒さんのご相談を３件ぐらい聞きました。先生方も保護者の方も困っていらっしゃるけれども、情報がどこにもなくて、ようやくここにたどり着いたみたいなきごとがありましたので、いろいろな学校の生徒さんがＳＳＷにつながれば良いと思いますし、いろいろなところにつなげてくれるコンシェルジュみたいな役割の方や場所があると良いと思っています。

それから、学校も行政も私たち民間の者も、同じ平場に立ってサポートすることができると一番良いと思っています。できれば、行政と民間、ＳＳＷの方、教員の方たち、それから当事者の方たちも入れた定例的な連絡協議会や懇談会を開催していただけると、とても良いのかなと思います。皆さんで話し合って困りごとを共有できれば、それはこういうふうにつながれば良いという提案ができたり、横につながったりできると思います。

あとは、当事者に経済的な支援をお願いしています。言葉は悪いですが、一歩出るためには勇気も必要ですが、お金も必要だと私はよく言っているのですが、経済的に困っている方がたくさんいらっしゃるって、その問題と不登校は切っても切れないと思います。学校に行っていれば、給食費と学年費ぐらいで、授業料などを支払わなくていいわけです。義務教育は、教育を受けさせなければいけない義務が私たち社会の側にあります。学校に行かないという選択をし

たからということで、その保護者の方の負担が増えて、フリースクールに行くお金が発生するのは少し不思議な気がしています。同じように学ぶ機会を設けるのであれば、教育バウチャー、クーポン券みたいなものの導入などをお考えいただければすごくありがたいかなと思っています。

あと、長野県は送迎問題が大きいです。広いですし、電車は1時間に1本しかありません。長野市にS a S a LANDが新しくできて、すごく盛況で50人以上が登録されていると聞いておりますが、S a S a LANDは送迎をつけていらっしゃる。やはりあれは大きいと思います。松本大学予備校は駅から歩いて7～8分です。出居番丸西もわざとまちなかに作ったのですが、松本駅からも北松本駅からも歩いて15分ぐらいです。子どもが来ようと思えば、電車にさえ乗れば歩いてこられるところでやってはいますが、やはり送迎問題は大きいです。安曇野市や塩尻市などになるともっと深刻だと思います。子どもが「ここで学びたい」と思ったとき、そこにどうやって移動するかは、地方都市の大きな問題だと考えています。

これはすごくおこがましいのですが、松本市としての不登校支援のビジョンを、ぜひ出していただければと思います。新たな学びの場に繋ぐというビジョンを明確にさせていただいて、私たちに繋げていただければと思います。

今までは学校が真ん中であって、そこに来るのが当たり前という社会だったと思いますが、今は子どもが真ん中であって、その周りに学校・フリースクール・ホームスタディなどいろいろな学びの選択肢があって、どの選択肢を子どもが選んでも、彼らのキャリアには何の問題もないというシステムをつくり上げなくてはいけないと思っています。大多数の子は学校を選ぶと思いますが、マイノリティかもしれないけれども学校を選ばないという生徒さんがいること、どうやって新たな学びの場に展開していくのかも考えていただければと思っています。

一応、この辺までが私が今日ご提案させていただくことになりますが、常日頃のEXPO-Jルームとかの様子を少し見ていただければと思います。

(動画) これは面白いんですよ。玉が坂を上っているように見えませんか。中学1年生の男の子と一緒に作ったのですが結構大変でした。

教科書準拠の勉強以外にも、みんなで卓球したり、近くの長沢川がどこから

来ているのかを調べたり、探究的な学びなどもやったりしています。

（写真）今、数学と理科ができる先生が来てくださって、この男の子は中学1年生ですが、小学校5年生ぐらいから学校に行っていないので個別対応です。不登校は奥が深く、中学2～3年生で私のところに来た子も、小学校3年生から学校に行っていないからと分数や割合から始めたり、アルファベットから始めたりと本当に個別対応です。この子は最小公倍数などから始めている様子です。

このような学びをしているEXPO-Jルームと、もう一つが出居番丸西です。この前、伊佐治さんにも来ていただきましたが、お城の近くの表具屋さんだった店舗兼住宅で、1階をまなびの場にして、2階も使っています。

（動画）これはすごく面白いのですが、真ん中にいる人は36歳ぐらいです。まいさばから、なかなか社会に出られないけれど、ルアーづくりが趣味の人がいると紹介を受けて、「机を1個貸してあげるので、ずっとルアーを作っていればいい」と言ったら、学校にもほかの学びのところにもなかなか入れなかった子たちが集まってきて、一緒にルアーをつくるようになりました。

この2人は中学3年生で、私たちは所属があることはすごく大事だと思っているので、高校に行ったほうがいいよと提案しましたが、彼らは今年の春、高校に行かない選択をしました。そうしたら、今2人ともとても元気にアルバイトに週4で行っています。学校に行かない、所属しないという選択をしたことで、自由になったのでしょうか。こういうパターンは、私たちもあまり見てこなかったもので、ああ、すごい、こういうこともあり得るなと考えています。

この男の子を真ん中に、多いときは小学校5年生の子たちも2人ぐらいいたりして、みんなでルアーをつくったりしています。これはルアーを流しているところです。

（写真）先ほどお話ししましたとおり、「地域の方と一緒にまなぶ」ということで、去年、松本県ヶ丘高校探究科の2年生の生徒さんが多世代交流をしたとやってきました。お話をしていく中で駄菓子屋をやりたいと言って、私もやりたいことだったので、ぜひやってくれるといいなと思って、友達で駄菓子屋をやっているところを紹介したり、一緒に見に行ったりしながら、10月9日に初めて1回目を実施した様子です。

「駄菓子屋らいと」ということで、奥の部屋では多世代交流という形で、いろいろな子どもたちが、まちのおじいちゃんやおばあちゃん、おばちゃんたちと一緒にお茶を飲んだりしている様子です。こんなこともできる場所があるのはすごいなと思っています。

さらに、「出居番ラジオ」を始めました。ポットキャストで検索していただくと聞いていただけます。出会いがまなびであれば、まち全体が学びになるはずです。まちがまなびの場、学校になればいいですねと。ただ、そうなったときに、人、こと、ものだけがつながって循環するのではなくて、お金や困りごととも循環するシステムができないかなと思って、インクルージョンサミットに行ったときに賛同してくださった若者がいて、松本市の職員の方一人と県の職員の方一人ですが、私のところで情報を発信することによって出居番のことを知ってもらって、みんなが横につながっていくきっかけになればと始めています。

（動画）私のところは、子どもたちの自立と、お母さんの自立と、出居番丸西の自立、という3つを掲げているのですが、先ほどお話ししたとおり、保護者も自分の人生を生きるのがいいと思っています。お母様方が結構きゅうきゅうとしてしまっていることが多くて、お家の中のパズルのピースがギチギチなんです。どれか一つのピースでも形が変わると、少し風通しが良くなります。お母さんのピースが変わるのが一番楽なんです。なので、お母さんもお金を少し持って、食事に行ったり、エステに行ったりできるといいなと思って、ちょっとした内職程度なのですが、チョコレート屋さんと組んで、オーガニックの焙煎したカカオ豆を私たちのところに預けていただいて、一個一個カカオ豆を潰すんです。そうすると、カカオニブとカカオの皮に分かれて、その中に胚芽が入っているのですが、それがあるとコンチングマシーンでチョコレートを潰したときに食味が悪くなるので、その胚芽取りをしています。

子どもたちは勉強したり遊んだりするのですが、お母さんもただそこにいるだけでなく、手を動かしながら喋るのはとてもいいんです。さらにいい匂い、幸せの匂いがします。それで、預かった豆が間に合わず、私たちが「こんな夜更けにカカオかよ」と作業していて、これはSNSに載せているので、出居番丸西を検索していただくと載っています。ワークショップや、こういったこと

をやっていますという宣伝などもしています。

（写真）そのほかにも、「きんじょの本棚」という、どこに返してもらってもいい、どこの本を持っていってもらってもいいという、まちが本棚になる、まちが図書館になるような取組みが町田市から始まっています。私のところからも少しずつ広がって行って、今、安曇野市でもやっていらっしゃるところが多いですし、本当にお家の軒先でこうやってできるので、いろんな方がここから本を持って行って、本が旅していくような取組みです。雨の日は本棚を中に入れているのですが、この前、雨の日に男の人がビニール袋に包んだ本を返しに来てくださいました。持っていかけていた人がいて、返しにきてくれたというだけでも、少し地域の方とつながれるかなと考えています。

これでおしまいです。皆さんウェルカムですのでぜひお越しください。いろいろな人が来てくださって、いろいろな大人を見せるのが私のところの学びだと思っています。ありがとうございました。

赤羽教育次長 ありがとうございました。それでは、ここからの意見交換の進行は臥雲市長にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

臥雲市長 今、岩田さんが取り組んでいる具体的な事例を踏まえて、不登校の子どもたちや保護者の方々にどういうアプローチが必要なのか、行政としては、教育委員会としては何が求められているのかというのを、多様な観点からご指摘をいただきましたので、教育委員お一人お一人から、ご質問や感想、ご意見を伺えたらと思います。

福澤委員 朝、散歩しながら仕事に行くのですが、週に何回か出居番丸西さんの前を通っているのです、中でこんなことが行われていたのだなと思いました。できた時から、これは何だろうと思っていました。

岩田氏 出居番丸西という名前も、それが狙いです。

福澤委員 今日は本当に新たな発見ができました。お話の中で、フリースクールに行く選択をするとお金がかかるのはなぜかとおっしゃったところは、私も確かにとと思いました。子どもを真ん中にしたときに、親の経済状況に左右されて子どもの人生が決まるのは望ましくないのです、そういう子どもたちのために取り組んでいらっしゃる方も、仕事として経済を回すことができ、子どもたちが学べる仕組みづくりは大事だなと思いました。

臥雲市長 経済的な支援は公立の学校あるいは私立の一条校が対象で、フリースクールや不登校の子どもたちが対象になっていません。少なくとも10～20年前であれば、公立学校あるいは一条校でほぼカバーできたので、国も自治体もそこに向けて財政支援を考えれば不合理でない状態だったと思いますが、これだけ公立や一条校の選択をしない子どもたちが出てきている以上、公的支出の対象を広げる必要性が極めて高くなっていると、私あるいは伊佐治教育長も認識をしていると思いますし、県でもそうした取り組みが始まっていると思います。

この広げ方をどうするか具体的な検討をして予算付けしていくことを、ぜひ教育委員会の皆さんも考えていただきたいと、それを受けて市長部局としても取り組みをしていきたいと思っています。

佐藤委員 実は、私の息子たちも不登校を経験し、信濃むつみ高校に2人ともお世話になり、お話を聞きながら自分のときのことを思い出して、ぐっとくるものがありました。

子どもたちに過敏性大腸炎やチックのような症状が出て、病院に行って、薬を変えながら、学校に行かなくなった段階でそれが起きなくなったときに、病院の医師から「学校が原因だと分かって、学校に行かなければ良いのだから、よかったですね」と言われて、医療的には確かにそれで体調は安定するということで、親としては安心した一方で、親として義務教育を受けさせなければいけないのをどのように保障したら良いのかを、やはり私自身悩みました。

私自身、外国由来の児童生徒の日本語教育をしていて、多様性に体感で納得できているので、子どもが家にいるという選択肢も本人が良いのであれば良いと納得して普通の生活を送っていたのですが、周りの家族が、もっとちゃんと親として心配しろと言ったんです。毎日こういう課題を与えてやらせろとか、やはり家族の中でもいろいろなあつれきが生じてくるわけです。委員なので、あまりナラティブな語りになってはいけないのですが、そういうことをいろいろ思い出しました。

義務教育という社会の役割があると同時に、法律的にも、親としての義務・役割もあると思います。どれを選んでも良いという選択肢が準備されていることは大事である一方で、やはり公立学校そのものも変わっていく必要があると、当時から今に至るまで強く感じていて、リーディングスクールやその他の取組

みを、親としても期待を持って見ていました。

ただ、社会が変わるというのは一朝一夕にはいけないので、下の子どもが卒業式だけやっと思行けて、そのときの挨拶で、「30代、40代ぐらいになったら普通の生活を送っていたい」と言ったんです。そういうふうに子どもに思わせている社会の現状、取り巻く環境があったのだと、私も改めて衝撃を受けて、大人として、社会を担う一員として、どのように現状を変えていけばいいのかなと、いまだに悩みながら進んでいるところです。

臥雲市長 社会が寛容にはなりつつあって、多様な選択肢が提示をされてきて、公立学校以外の選択をしたときに、学びの保障というところで、岩田さんが意識をされていたり、手応えとして感じておられることはありますか。

岩田氏 何が「学び」なのかに関して、大人の私たちも、「私はこう思う」「そういうことも学びだ」という考えを持って話ができないといけないと思います。計算や漢字の読み書きなどが学びなのかと言ったら、今はスマホを持っていて、使い方さえ分かればできてしまいます。

先ほど、出会いがまなびの第一歩とお話しさせていただきましたが、私のところの生徒さんはスマホをずっといじっていたりします。出居番丸西に来る子はほとんどそうです。でも、変な大人が来て「ケニアに行った」と話し始めると、耳はダンボですごく聞いていて、「え、何でケニア？」と、話に乗っかってきます。そういうのが、私は「まなび」だと思っていて、それを選択する子はそこを選択すればいい、みたいなものが出来上がるというんです。

ただ、EXPO-Jルームは教科書準拠の内容をしているので、学び直しの形で振り返って学ぶ子もいますし、今日来ていた中学3年生は、学校の勉強は全部自分でやってしまっていて面白くないからからといって数Ⅲをやっています。大学には行きたいけれど、数学で大学に行くつもりはなくて、哲学をやりたいと言っています。だから本当に、文部科学省のいう「個別最適な学び」とはどんなことなのかというのは、すごく考えますね。

春原委員 岩田さんの今日のお話、出居番丸西に集まる子どもたちの素直で正直な姿、本当に目から鱗です。学ぶとはどういうことか、改めて考えさせられます。

今、学校という空間の中で、子どもたちにとって様々な困難なことが発生しているけれど、大人は気づいていない部分があって、その子どもたちにとって

みると、いろいろな要因が重なり、学校が怖かったり、つらかったり、自分に合わないことがあって、結果的に学校に行けない状態になってしまったということだと思います。

多様な学び、個別最適な学びを支援することを考えたときに、学びの機会をいろいろな角度で提供し、子どもがそこにきっかけを得て、将来への歩みにつながっていけることになると思います。その意味からも、登校することのみではなく、学校外での学びの機会を充実させることが必要だと思います。

学校では、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの対応も必要とされています。カウンセリングは教員でも対応していかなければいけないことですので、お互いに連携し、情報を交換していけるといいと思いました。

臥雲市長 先ほど、附属中学はスクールソーシャルワーカーがないという話がありましたが、松本市立の小中学校に限定しなくても、市内の学校で柔軟に利用できるようにすれば良い話だと思いますし、行政、民間、当事者の定期的な連絡協議会も非常に必要性が高いと思いますが、伊佐治教育長はどうですか。

伊佐治教育長 実は、市議会6月定例会で予算案を提出しているのですが、今年度後半から、家から出られない子たちのための支援をしていくオンライン上の教育支援センターをつくろうと、今いろいろなことを協議しています。

その中の意見交換で出てきたことが、まさに今日ご指摘いただいたことで、情報が足りていないということと、民間の方たちとの連絡会を開いて、こういう事業が始まるので、子どもたちが例えば週2日ぐらいオンラインの教育支援センターに参加して、週1日は学校に行って、あと2日は地域の居場所に行くとかでも良いのではないかなど、そういう選択をしてくれた子たちを応援できるような仕組みをつくっていきたいと思っています。まずは、どこかとつながる支援をしていきたいと思っていますが、その中で、今ご指摘いただいたことは、改善できることからすぐにやっていきたいと思っています。

それと、コンシェルジュのような方がいたら良いというお話がありましたが、実は、不登校支援アドバイザーを2人置いています。私たちの発信が足りなかったなと思って、最後にご提案いただいた不登校支援のビジョンとあわせて、困ったらこういう仕組みがあるからいつでも相談してというメッセージを、もう少し丁寧に発信していこうと思っています。これは今年度内に対応してい

たいと思います。

お話を聞く中で改めてはっとしたのは、子どもに何かあると、なぜか母親に負担がいくということです。母親にも自分の人生を生きてほしいという視点は本当に大事だと思いました。

学校も、先生が元気でいないと子どもたちにやさしくできないですし、家庭も、保護者が元気でいないと子どもは幸せになれないと思います。でも、学校の先生たちも日々苦しい中で、親御さんが子どもの状態にすごく悩んで、トラブルが重層化していく原因にもなっています。スクールソーシャルワーカーも増員していますが、視点を切り分けるのではなくて、岩田さんの活動をはじめ民間の方たちの力を借りながら、包括的にその子を真ん中に支援していくことが大事だなと改めて感じました。

臥雲市長 教育における公私の仕切りが、現実とそぐわなくなっていると思います。かつては公の部分で抱え込めたものが、そうではなくなっているのに、パブリックセクターとそうでない部分を明確に分けてやるのが、いろいろな意味で限界に来ていると思います。

少し話はずれますが、学校給食も、市立の小中学校に提供してきましたが、私立の学校がもしご希望になるのであれば、松本市の学校給食センターでつくる給食を提供することを今検討してもらっているところです。

松本市で、教育に関わるインフラやサービスを、今までの公私の仕切りにとられずに提供していくことが、いろいろな分野で必要になっていると思います。そうであるならば、先ほどのご提案にある定期的な連絡協議会的なものは不登校支援という文脈でのお話だと思いますが、それを一つの入り口にして、教育における公私の再定義、再編を進めていければと思います。

小柳委員 今までの学校中心の学びではなく、子どもが主体の学びへというお考えをお聞きすることができて、改めて勉強になったところです。学校は学習指導要領を基に学びを構成している面があるので、これらを中心として学びを推進していくのではなく、子どもの内なる欲求や願い、子どもの求めるところから学びのよりどころをつくっていくということだと受け止めさせていただきました。

私も不登校支援アドバイザーの先生方に帯同して学校訪問させていただく中で、子どもたちの状況を教えていただいています。そうしますと、子どもた

ちの状況は本当に一人一人違って、支援や助言も一人一人違うということ
を改めて教えられます。子どもの持つ願いや欲求はそれぞればらばらで、学校
から遠ざかる理由もばらばらですが、松本市は教育、福祉、医療などの領域で
の連携を取りながらなんとか支援していこうという動きをずっとしてきてい
ると思います。

特に、行政の中での他分野との連携という点では、不登校の子どもたちが活動
できるよう、松原公民館や笹賀公民館をお借りして、ほっとスペースという場
所を開いて提供していますし、不登校支援アドバイザーの先生によれば、今後
は児童センターでの活動の可能性も模索しているという話を聞いています。

今日のお話では、それをさらに広げて、民間の方々との連携が必要になって
くるのかなと思います。それは、「民間と連携しなければ」ということが先に
あるのではなく、子どもを真ん中にしたときに、その子が望んだり、願ったり
したことが、民間と連携しなければ解決していかないというところから生じて
くると思います。

臥雲市長 教育、福祉、医療の連携で言いますと、不登校と少しずれますが、発達障害
をはじめとした特別支援が必要な子どもたちを、学校とご家庭だけではなく、
医師や保健師や様々な立場の人たちで支えていこうということで、インクルー
シブセンターをこの4月から立ち上げましたが、連携、つながり、サポートの
在り方という意味では、向かっていく方向として何か共通する部分があるのだ
はないかと感じたところです。

ここまで、それぞれの委員の皆さんにお話をいただきながら意見交換してき
ましたが、荒井さん、今までのお話を聞いて、いかがでしょうか。

荒井教育顧問 今日のお話から、行政による支援のあり方という観点からコメントさせて
いただきます。

まず、前提として重要なことは、「不登校は問題行動ではない」という認識
をみんなで共有していくということです。また、不登校という現象は、誰かに
とっての個別問題ではなくて、誰にでも起こり得る可能性があることであると、
多くの方が寛容的にこの現象を受け止めていく地域社会を作っていく必要が
あります。その上で、3つの観点からコメントさせていただきます。

一つ目は、松本市としての不登校支援のビジョンが必要ではないかという点

です。松本市として、不登校に対して、どのようなまなざしで、どのように捉え、どのような支援をしていくのかを市民の皆様に分かりやすく伝えていく必要があります。

二つ目は、行政がコーディネートしながら、多様な支援団体、関係者の皆様と情報共有のための連絡協議会を設けていく必要があるのではないかという点です。ここでのポイントは、市教委が主導するという点にあります。長野県内でも民間団体同士のネットワーク化を図る動きがあったり、県ではフリースクール認証制度も始まっております。現在、県内の市町村でも、教育委員会が主導して連絡協議会や情報交換会、交流会を設置していく動きが出てきています。例えば諏訪市では、全ての学校教職員の管理職と、諏訪圏内の民間団体が集い情報共有を行う場を設けておられます。なお、もう一步踏み出すとするならば、塩尻市さんが取り組んでおられますが、親の会とのコミュニケーションのあり方についても検討していくことが挙げられます。孤独感を感じている親御さんに対しては、関わり方によっては不登校に対する支援のみならず、息苦しさや生き難さの支援にもつながっていくのではないかと思います。

三つ目は、経済的負担の軽減です。数年前に行われた国の全国調査では、フリースクール利用の平均費用は月約3万3,000円という結果が出ております。入会金の平均も5万3,000円程度とされています。諏訪市や長野市では、世帯の状況に応じて支援を傾斜しておりますが、取組みを進めています。松本市としても、一步踏み出す必要があると思います。

以上、不登校支援のビジョンの策定、民間施設や保護者の皆さんとの連絡協議会の開催、経済的負担の軽減の支援策についてぜひ検討いただきたいです。

臥雲市長 ありがとうございます。今の3点は、いずれも先ほど岩田さんが触れられた点でもあると思いますが、岩田さん、改めてこの3点について何か付け加えることはございますか。

岩田氏 私たちは長野県各地のフリースクールの仲間と連絡協議会をつくって声を上げ始めたのですが、今、荒井先生が言ってくださったのは、そこでも毎回話題になっていることで、保護者の経済的負担軽減は本当にやっていただきたいと思っています。

フリースクール認証制度ができたことによって、私たちフリースクールに対

する県の補助の取組みが始まっており、これがどのように動いていくのを見ていく必要があると思っていますが、それに伴って当事者側をサポートしていただくのは市町村の役割だと思うので、できれば就学支援とかではないご家庭にも入れていただけるような仕組みが成り立っていくと良いと思っています。

連絡協議会の設置も本当に大切なことです。あとお願いしたいのは、先ほどの送迎問題です。経済的な負担軽減に入るかもしれませんが、送迎問題と保護者への支援も、実は不登校の生徒さんの問題だけではなくて大きな問題だと思っています。

臥雲市長 荒井先生、県の信州型フリースクール認証制度ですが、対象範囲は、例えば外国語教育に特化した学校などは、線を引いていますよね。

荒井教育顧問 はい。現状は不登校児童生徒に対する支援をメインにされているところとなっております。

臥雲市長 実はよく目を凝らしていくと、境界領域みたいな学校があるのではないか、あるいはそもそも「不登校」という言葉に即して考えると、学校に行かないということは、今は対象としていないデモクラティックなものも「不登校」という捉え方もできなくないと思います。県がつくった仕組みをベースにして、家庭の経済的負担軽減のための政策を考えていく際に、不登校支援、あるいはフリースクール通学支援の範囲をどう定義づけるかということが、庁内での議論の一つのポイントだと思います。

荒井教育顧問 重要な論点だと思います。今、市長がおっしゃられたのは、学術的には「積極的不登校」と言われるカテゴリーになります。「学校に行かない」ということを積極的に選択しているという方々となります。行政施策の優先順位という観点からすれば、積極的不登校よりも消極的不登校、さらには社会的な不登校とも呼ばれることのある「子どもの貧困」問題と直結する方を対象とした施策の優先順位を上げていくべきだと思います。

臥雲市長 伊佐治さん、荒井さんが改めて整理をした、不登校をどう捉えてどう支援していくかという松本市のビジョンを明確に示す必要があるということ、行政主体で多様な主体・当事者の連絡協議会を設置するということ、そして、不登校、あるいはフリースクールの範囲をしっかりと整理しながら、経済的負担軽減策をどう実行していくかということの3点について、改めてどういう見解ですか。

伊佐治教育長 1点目と2点目は、今まさに教育委員会事務局で研究しておりますので、10月を想定しているオンライン上の教育支援センターのスタートに合わせる形で進めていきたいと思っています。

3点目は、フリースクールに行っていることや積極的な不登校の方を出席と認めるかどうかについては、現在は少し慎重にならざるを得ないという結論を出していますが、今度、経済的支援となると政策的に重要なポイントになってきますので、市長とも相談をしながら考えたいと思います。

いずれにしても、要保護・準要保護はもちろんですが、相対的貧困と言われる層の子どもたちを救っていくことは必要だと思っています。どのような線引き、基準を設けるかについては、財政面の負担もございますので、市長とも相談しながら教育委員会で原案をつくってまいりたいと思います。

臥雲市長 今日、岩田さんからいただいた提言と、荒井先生の整理を踏まえて、今の段階での松本市教育委員会としての見解も明確になったと思います。

予定をした時間に近づいてきましたので、これは言っておきたいという方がありましたらご発言いただきたいと思います。いかがでしょうか。

岩田氏 茅野駅前にベルビアというビルがあるのですが、2階は「チノチノ」という中高生の居場所になっていて、3階は「0123」という0～3歳児の子どもを連れてお母さんも集まれる場所があります。もし、パルコなどの後利用をお考えでしたら、駅にも近いですし、子どもたちや保護者のためにそういったこともお考えいただければと思います。それが「学びの多様な学校」みたいなものにつながっていけば、今の教育のシステムを変える良い起爆剤になるのではないかと考えているので、ぜひそんなところまでお考えいただければありがたいと思います。

臥雲市長 子どもあるいは子育て世代、若者の居場所をまちなかにつくることが、パルコの後利用を検討するときに私たちが一番根底に置いていたことでした。パルコの後利用自体は一連の経過をもって一旦終止符が打たれましたが、6月議会に提案を予定しておりますが、松本駅前を中心に駅前から松本城までの市街地の中核エリアの新たな指針・見取り図をつくろうとしています。つくるに当たっては、各界の皆さんとの議論を年度内に行いたいと思っています。

松本駅から本町にかけての駅前大通りの南側につきましては、駅ビルも含め

て民間資本の人たちがいろいろ見直しをするタイミングが重なってきましたので、私たちもアンテナを高くして、意見交換を密にして、民間資本の再開発の動きに連動させられるように、今回立ち上げる検討会議の中でも大きなテーマの一つにできるように目指していきたいと思っています。

それでは、子どもたちの多様な学びを保障するために、今取り組まなければいけないことを3点に整理していただいて、進んでいくことを確認できたと思いますので、ここで会議を閉じさせていただきたいと思います。

今日は、岩田さん、ありがとうございました。

そして、荒井さん、ありがとうございました。

赤羽教育次長 ありがとうございました。本日予定していた議事は全て終わりました。

本日の内容につきましては、事務局で議事録を作成し、速やかに公表していきます。

以上をもちまして、令和6年度第1回松本市総合教育会議を閉じます。ありがとうございました。

《閉会宣言》

教育次長 令和6年度第1回松本市総合教育会議を閉じる旨宣言した。

<午後4時55分閉会>

会議録調製職員

教育政策課教育政策担当係長

伏見 宏美